ネイル村にて
～結婚のご挨拶
＆久しぶりの帰
省～

ネイル村にて　～結婚のご挨拶＆久しぶりの帰省～

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16578611

ヒュンマ

2021年10月17日(日)ヒュンマフェスにTwitter上で掲載していた小話です。当日は主催、藤沢個人、空き店舗でネイル村のマァムちゃんの家を想像して配置しておりました。
マァムちゃんの部屋、リビング、キッチンの三つです。
これらはヒュンマフェス・ウィンターでもまた載せますので、遊びにいらしてくださいねヾ(≧▽≦)ﾉ
このお話ではナチュラルにヒュンマ結婚しています。あと、子供の名前はたまきずの勇者くんの名前です。タイトルは……やっぱり浮かびませんでした(笑)

Table of Contents

ネイル村にて　～結婚のご挨拶＆久しぶりの帰省～

◆彼女の私室（結婚前のご挨拶）

「ヒュンケル、どうぞ」
　促されて、彼女の私室に入る。

　大戦が終わり、紆余曲折の末結ばれたオレ達は、ようやく彼女の母親であるレイラに挨拶に来た。
　ネイル村の家は大きな丸太で作られた家も多く、マァムの家も丸太で作られている。素朴なやさしい色合いの家だった。
　彼女がこの部屋に戻ってこなくても整えられていたようで、まるで昨日も寝泊まりしたかのような雰囲気だ。
　窓際の棚の上には可愛らしい花。
　きっと、レイラが摘んできたのだろう。
　それだけで、彼女が母親から愛され、大事にされていることがわかる。
　箪笥の上には可愛らしい熊のぬいぐるみと人形。花の額。
　村を守るために頑張っていたと聞いたが、部屋の中は少女らしい物が多い。
「あ、これ？」
　マァムがヒュンケルの視線を辿って箪笥の上を見やる。
「ふふ」
　小さく笑って縦ロールの人形を抱き上げる。
「父さんがね、まだ私が母さんのお腹の中にいた時に買ってきたのよ」
　遠い思い出を辿る目。

「そうか」
「女の子か男の子かも、わからなかったのに」
　くすくすと笑いながら人形を元の位置に戻す。
「こっちのクマさんは、父さんと隣村に遊びに行った時に買ってもらったの。父さんみたいって思って」
「……熊のような人だったのか？」
　確か、戦士だったと聞いている。
「小さな頃は父さんがとっても大きく見えて」
　くすくすと笑う声は、僅かばかり儚い。
「マァムは可愛い物が好きなんだなって笑う父さんを、鮮明に覚えてる」
「……いい思い出だな」
「うん」
　窓際に佇んで、外を眺める彼女。
　その彼女に近付いて、腕を広げる。
「……」
　マァムはオレの胸元を見てから見上げてきた。
「今は、オレがいる」
「……うん」
　マァムは小さく頷くと……おずおずとオレの腕の中に収まる。
　きゅっと抱き付く彼女の背を撫でる。
　――――死んだ者には敵わない。
　どこで聞いた言葉かは忘れてしまったが……
「泣くなら、オレの腕の中で泣け」
「うん。ヒュンケルも私の腕の中で泣いてね」
「……ああ」
　彼女の腕の中で、ただ泣けるかどうかは断言出来ない。きっと、よこしまな思いのが強くなってしまうだろう。

「マァムー、ヒュンケルさーん、お茶が入ったわよ～」
　レイラの呼ぶ声が聞こえる。
　お土産に持ってきたパプニカ城下町のクッキーは気に入ってもら

えるのだろうか。そういえば、きちんと見ていなかったがキメラの翼で移動した際に割れていないだろうか……
　不意に些細なことが気になる。
「……ヒュンケル？」
　怪訝そうに見上げられて、素直にクッキーが無事か急に心配になったことを告げれば、マァムは口元きゅっとしてから我慢出来ずに吹き出していた。
　なぜ笑う。
「無事だと……いいわね」
「着地で失敗していないから無事な確率は高いと思うが……」
　高級なクッキーを二人で選んだのだ。
　無事であって欲しい。
「食べて、確かめましょう」
　マァムに手を引かれて部屋を出る。
　視線を感じて振り向けば、熊のぬいぐるみが微笑んでいるように見えた。

おしまい

◆久し振りのネイル村（あ1、あ3）
　（ヒュンマ結婚後、子供が産まれてからの話）

　ネイル村にあるマァムの実家に、ヒュンケルとマァムは数ヶ月振りに訪れていた。義母のレイラは「ゆっくりしていらっしゃい」と微笑むが、マァムは母親の傍にいたいのか台所でいろいろ手伝っていた。
　料理などがやや苦手なマァムは、得意な力仕事や、家の修繕などを請け負っている。
　ヒュンケルとしては手伝いたいが、幼子二人を放置する訳にはいかない。

銀の髪、マァムのようなやさしい目許をした長男は、まだ赤子の妹にべったりだ。薄桃色の髪、可愛らしい目許の娘は、マァムにうり二つ。
　赤子を抱き、ゆらゆらと揺れる。
　これが意外と辛い。
　少しでも止まるとふぎゃふぎゃと子猫のように泣くのだ。
　可愛いが、辛い。
　長男は家の中を興味深そうに眺めたり、自分によじ登ってはしゃいだりと自由だ。
　暖炉の前にくつろぐためのカーペット。大きな本棚には戦士や僧侶が読むような本と共に、子供が喜ぶような本が下段に並んでいる。
　本を読んでやりたいが、揺れていないと娘が泣く。思案していると息子は勝手に本を取り出して開いて遊んでいた。
　それをゆらゆらと揺れながら眺める。
「ヒュンケル、ヒース。お昼はね、とっておきのハムとソーセージがあるんですって。焼くのとシチューにするのとどちらがいい？って」
　レイラから聞いてくるようにいわれたのだろう。マァムが扉から顔を覗かせて聞いてくる。
「うーん、うーーーん」
　ヒースがうんうんと唸っている。
　子供にとっては、大好きなハムとソーセージをどう食べるかは大問題なのだろう。微笑ましい。
「ヒュンケル、代わりましょうか？」
　マァムが聞いてくるが微笑んで首を振る。
「大丈夫だ」
　母親との時間を邪魔したくない。
「そう？」
「母さん、シチューがいい！」
　息子が元気な声で手を上げた。
「シチュー、良いわね」
「おばあちゃんのお手伝いする！」

手伝いはできないだろう。そう思うが、マァムは息子の頭をやさしく撫でてから抱き上げる。
「じゃあ、玉ねぎ一緒に剥きましょうか」
　些細なやり取りをしてから、妻と娘が台所に向かうのを見送る。
　ヒュンケルはいつの間にか眠った娘を腕に抱いて、本棚の傍の椅子に座る。
　座ってみると、この位置は暖炉の前でくつろぐ家族がよく見えると気が付いた。右隣の棚には高価な銘柄の酒がいくつか。
　きっと、マァムの父親のロカが生きていた時は、ここで酒を嗜んでいたりしたのだろう。
「ヒュンケル……」
　台所に向かったはずのマァムが顔を出した。
　自分が座っているのを見やって首を傾げる。
「お酒、飲む？」
「いや、いい」
　酒は飲めるが、一人でしんみりと飲むことはあまりしない。
　マァムは目をぱちぱちと瞬かせると微笑んだ。
「うっすらとした記憶なんだけどね……ここに父さんが座っていたの覚えてる」
「そうか」
「父さん、体が大きいからとっても窮屈そうだったの。今のあなたと一緒」
　くすくすとマァムが笑う。
　彼女の父親が生きていれば、眦を緩めて孫娘を溺愛し、剣や槍に興味を持ちだした息子を嬉々として相手をしてくれただろう。
　そして、それは自分の父親……バルトスも同じだ、きっと。
「ヒュンケルって、意外とお酒飲まないわよね」
　マァムが娘の顔を覗き込みながら呟く。
「そうか？……クロコダインやラーハルトと一緒なら飲むが」
「そういえば、そうね。家でもっと飲んでもいいのよ？」
　首を傾げられて、ヒュンケルは微笑む。
「酒より……」
　妻の顔を見上げて目を細める。

酒よりマァムのキスが欲しいのは、マァムにも伝わったはずだ。なぜなら今のマァムの顔は真っ赤だから。
　――――幸福のが酔う。
　囁けば、マァムが掠めるようにくちづけてくれた。
　物足りないが、時と場所は考えるべきだ。

　穏やかな祖母、やんちゃな息子、夜泣きは凄いが可愛い娘。そして最愛の妻。
　あまりの幸福に、酩酊感に襲われる。

「今なら、シチューでも酔えそうだ」
　オレの言葉に、マァムが声を上げて笑った。

おしまい